世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『インドからの呼び声』

第 19 話

制 作　日本アニメーション
　　　　フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第十九話「インドからの呼び声」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
アーメンガード
ロッテイ
ラビニア
ジエシー
ガートルード

モリー

ジェームス

バロー弁護士

事務員

郵便配達夫

インド航路の船員

エミリー（人形）

シーザー（猫）

1 ミンチン女学院・表

水桶を脇に、石畳みを洗っているセーラ。

傍で昼寝をしているシーザー、ピクンと耳を動かす。

× × ×

通りに、郵便馬車が停り、御者台から配達夫が降り立つ。

× × ×

立上り、振返るセーラ――、シーザーも起上る。

× × ×

荷台から、積んだ郵便行嚢の一つを摑むと、配達夫が、セーラの方に近づいて来る。

怪訝に唸るシーザー。

配達夫「郵便だよ。この袋全部がミンチン学院の分だ」

セーラ「ごくろうさま」

配達夫「メイドさん、受取りを頼むよ」
セーラ「はい、郵便屋さん」
紙片と行嚢を受取り、中へ――配達夫を見ながら続こうとしたシーザー、ドアへガツン。

2

同・廊下

行嚢を運んで来たセーラ、院長室のドアをノックする。
ドアが開き、アメリアが顔を出す。
セーラ「あ、アメリア先生、郵便です」
アメリア「はい、ごくろうさん」
セーラ「それから、受取りにサインを……」
アメリア「はい、判りました……」
行嚢と紙片を受取り、中へ消える。

3

同・院長室

逆さにされた行嚢から、テーブルに十数通の手紙、書籍小包などがこぼれ落ちる。

その中に、ドサリと束になった手紙がある——取上げたアメリアが、怪訝に、その手紙束を見る。

アメリア「お姉様……」

デスクで、受取りにサインしたミンチンが、振返る。

ミンチン「別に妙な手紙は入ってないでしょうね」

アメリア「いえ、あの、これを……」

手紙の束を見せる——受取って、確めたミンチンの顔色が変る。

アメリア「ど、どう致しましょう」

ミンチン「（ジロリ）この件は、私が処理します。生徒たちに手紙を配りなさい」

受取りの紙片を渡す――

アメリア「は、はい、お姉さま……」

4 同・廊下

ドアが開き、待っているセーラの所へ、空になった行嚢と紙片を手に出て来るアメリア――

アメリア「では、郵便屋さんにこれを……」

セーラ「はい、アメリア先生……」

5 同・表

出て来たセーラ、配達夫に行嚢と受取りの紙片を渡す。

セーラ「ごくろうさま」

配達夫「有難うよ、メイドさん」

配達夫、馬車に戻り、乗り込むと走り出す。

見送るセーラ――

6 同・二階の廊下

振鈴が鳴り、アメリアの声が呼ぶ――

アメリアの声「皆さん！……お手紙を配りますよオ……集って下さい！……」

忽ち、部屋部屋のドアが開き、ラビニア、ジェシー、ガートルード以下の女生徒たちが、どっと飛び出して来る。

その中に、突き飛ばされて転がるロッテイと、助け起すアーメンガード――

7 同・一階の廊下

教室のドアから、掃除道具を手にしたセーラとベッキーが出て来る――

ふと、女生徒たちの歓声に、はっと立停る――

×　　　×　　　×

女生徒たちに囲まれて、アメリアが届いた手紙を配っている。

アメリア「はい、ラビニアさん、お母様から……アメリカのお金が入ってるようよ」

嘆声に、得意気に受取るラビニア。

アメリア「はい、ロッテイ、パパから絵葉書」

ロッテイ「うわあイ」

アメリア「はい、アーメンガード、お父様が本を送って下さったわ（小包を渡す）」

アーメンガード「え、また本……」

どっと笑うラビニア、ガートルード、ジエシーたち――

×　　　×　　　×

離れて、立尽すセーラと、心配そうに顔色を窺うベッキー。

ベッキー「お嬢様……」

セーラ、はっとベッキーを見たが、淋しい微笑をつくる――

セーラ「心配しないで、ベッキー……私、もう、お父様から手紙が来ない事には、馴れてしまったのよ。さ、行きましょう」

×　　　×　　　×

アメリアが手紙を配り終えて、院長室に入り、女生徒たちは、それぞれに手紙や小包を手に散りかける。

その脇を、掃除道具を手に来かかるセーラとベッキー。

アーメンガード「あ、セーラ……」

ロッテイ「セーラ・ママ……」

ラビニアたち、肩をすぼめ合う。

ラビニア「フフ、お気の毒ね、誰からも手紙が来ないなんて」
ジェシー「無理よね、親もいないんですもの」
ガートルード「なんなら私達の読ませてあげましょうか」
アーメンガード「ひ、ひどいわ、そんな云い方」
ロッテイ「そうよ、セーラ・ママが可哀想よ」
ラビニア「あら、私達、セーラに同情してあげてるだけよ。心から
ね」

冷笑するジェシー、ガートルードたち。

その時、院長室のドアが開き、ミンチンが現われる。

ミンチン「おや、セーラ……丁度よい所にいましたね……お前に、
手紙が届いていています」
セーラ「え、私に……」

驚きざわめくラビニア以下の女生徒たち。

ミンチン「（冷たく頷く）そう……それも、インドからです」
セーラ「イ、インドから……」

ミンチン「欲しければ、受け取りに来るように……」

ミンチン、院長室に入って行く。

茫然と立尽すセーラ——

ロッテイ「セーラ・ママ……インドからって誰から」

アーメンガード「まさか、お父様が……」

ラビニア「そんな筈ないわ！」

ジエシー「そうよ、セーラのお父さんは、インドで死んでるのよ。来たら幽霊だわ」

じっと立尽していたセーラ、無言で掃除道具を置くと、

院長室のドアへ——

8
同・院長室

ノックの音——

ミンチンの声「お入り……」

ドアが開き、セーラがそっと入る。
デスクから、手紙の束を手にしたミンチンと泣顔のアメリアが振返る。

ミンチン「これが、インドからお前宛に届いた手紙です」

手にした手紙の束を渡す。

受取って茫然と見るセーラ――

紐で束ねられた七、八通の封筒は、破れ傷んだ、かつてセーラが父へ出した手紙である。

ミンチン「そう……その手紙は、全て、以前お前がインドの父親宛てに送った手紙です」

アメリアが、ハンカチで涙を押え、

アメリア「きっと、お父様が亡くなったあと向うへ届いて、受取人もないまま、またはるばるインドから送り返されて来たんですわ」

凝然と手紙の束をみつめるセーラ、その手が悲しみに

震える――

ミンチン「さ、これでインドにいたお前の父親が、もう生きてはいないんだって事が、はっきり呑み込めたでしょう……お戻り」

セーラ、いきなり翻ってドアを飛び出す。

9 同・廊下

飛び出したセーラ、驚くラビニアたちに構わず、地下への階段を駆け降りる――

ベッキー「お嬢様……！」

慌てて追うベッキー――

茫然と見送るアーメンガードとロッティ。

顔を見合せて肩をすくめるラビニアたち。

10

同・地下の作業場

アイロン台に置かれた手紙、手紙、手紙。
涙の眼で、じっとみつめているセーラ。
入口から、ベッキーが心配そうに入って来る。

ベッキー「お嬢様……」
セーラ、振返ると静かに首を横に振る。

セーラ「見た通りよ……これは私宛に来た手紙なんかじゃなかったの」

ベッキー「えっ……」

セーラ「私、お父様と約束していたの」

11

フラッシュ（第二話シーン23より）

セーラとクルー――

セーラ「私、お父様に手紙を書くわ……週に一度づつ……」
クルー「（頷く）では、私は週に二度づつ手紙を送ろう……インドの事や、私の仕事の事や、セーラの夢を見たなんて事もね」
セーラ、じっとみつめて頷く――

12 ミンチン女学院・地下の作業場

セーラ「だから、お父様が亡くなった事も知らずに、ずっと手紙を出していたの……その手紙が、今頃やっと、まとめて送り返されて来たのよ」
ベッキー「お嬢様……（泣く）」
セーラ「ベッキー……私、ずっと考えて来たのだけれど、今、決心がついたわ」
ベッキー「え……？」
セーラ「お父様の事を調べてみるの……せめて、お父様の最后の事

を知りたいのよ」

ベッキー「でも……どうやって……」

セーラ「お父様のロンドンでの代理人だったバロー弁護士に聞くわ

……そうすれば、きっとなにか手掛りがつかめると思うわ」

その時、モリーの呼ぶ声。

声「セーラ……ベッキー……」

はっとなるセーラとベッキー――

13 同・台所

入って来るセーラとベッキー。

モリー「セーラ、市場へ買い出しに行く時間だよ」

セーラ「はい、モリーさん」

モリー「お前は早く掃除を片附けて！」

ベッキー「は、はい、只今……」

14 同・表

地下からの階段を上って来る籠を抱えたセーラ、通りへ——

15 街路

轟然と高架を通過する蒸気機関車と列車。

× × ×

来かかるセーラ、ふと足を停め、決意したように一方へ歩き出す——

16 バロー法律事務所・表

来るセーラ、ドアを見上げたが、ノック。

17

同・事務室

デスクで書類を見ているバローの所へ、若い事務員が入って来る――

事務員「先生。セーラ・クルーと云う女の子が訪ねて参ってますが」

バロー「なに、セーラ・クルーだと？」

事務員「はい、ぜひ先生に逢いたいとかで」

バロー「ふむ。大方金でもせびりに来たんだろう。ま、入れてやりなさい」

事務員「はい……」

事務員がドアに去り、やがて、そのドアから買物籠を抱えたセーラが入って来る。

セーラ「今日は、バローさん……」

バロー「（立つ）挨拶なんていい。さ、金は恵んでやるが、そう何度も来るんじゃないぞ（財布から小銭を出しかける）」――

セーラ「ち、違うんです。私、お金を恵んで貰いに来たんじゃないんです」

バロー「（手が停り）なんだと？」

セーラ「私、お父様の最后のことを、うかがいに来たんです」

バロー「なんだ……そんな話か」

小銭を財布に戻し、ポケットに納めかける。

セーラ「お願いです、バローさん。お父様が亡くなった時の詳しい様子を……」

バロー「フン、今更なにを妙な事を聞きに来るんだ。そんな話を聞いたって、今のお前が変る訳じゃないんだぞ」

セーラ「判っています……でも、それだけは知っていたかったんです」

バロー「よかろう……それ程聞きたがるなら話してやろう」

バロー、威丈高にセーラの前に立ち、指を振る――

バロー「いいか。お前の父親は、昔の親友とかにだまされて、全財

産をそいつのボロ鉱山にぶち込んで、破産しちまったのさ」

セーラ「だまされたですって？」

バロー「そうさ。お前の父親は、なんとかダイヤの一粒でも見つけようと、そのボロ鉱山に入り込んでな、たちの悪い熱病にとりつかれて、たった三日で死んだそうだよ」

セーラ「（茫然）では、そのお友達とかは、今はどこに……」

バロー「知らんね」

セーラ「名前は？」

バロー「忘れたよ。そんな男の名前など、憶えておく値打ちもなかろう」

セーラ、茫然と立尽す。

バロー「私が知っとるのは、そこ迄だ……なにしろ問い合せの手紙を出しても、往復で五十日はかかるインドの奥地だ。費用もかかる。正直云って私も諦めるしかなかったんだ」

セーラ、凝然と聞く――

バロー「さあさあ、馬鹿な話でこれ以上私の仕事の邪魔をせんでくれ……お前さんが、あの学院に居残れるよう、ミンチン院長にかけ合ってやったのは、この私なんだぞ……それだけでも、お前は私に恩義を感じてくれて当然なんだ。そいつを忘れんで貰いたいな」

じっとバローを見るセーラ——

——C・M——

18 コベントガーデン市場・全景

19 同・馬車のたまり

馬車馬に水呑み場の水を呑ませる御者たち――

× × ×

その一隅のベンチに、野菜の籠を持ったピーターと、

セーラが来て坐る――

ピーター「畜生、なんて無責任な弁護士なんです。代理人だったなら、お嬢様の為に、お父様の消息を確める位当り前じゃありませんか」

セーラ「でも、それには時間と費用がかかるからとかで……」

ピーター「だからお嬢様は人が好すぎると云うんです……ようし、こうなったら、俺が協力しますよ」

セーラ「有難う、ピーター……でも、私に一体なにが出来るのか……」

ピーター「出来ますとも……インドへ手紙を出すんですよ」

セーラ「えっ……だけど、お父様に出した手紙は、みんな戻って来てしまったのよ」

ピーター「（首を振る）インドの、警察署とか、裁判所とかに出してみるんです……きっと何か返事があるに違いありませんよ」

セーラ「まあ……ピーターったら、すごく世の中の事を知ってるのね」

ピーター「なあに、父さんが昔、裁判所の御者をやってたから、その位知ってるんですよ」

セーラ「でも、困ったわ……私、切手を買うお金も、封筒を買うお金も持ってはいないのよ」

ピーター「えっ……」

セーラ、ポケットから、コインを二枚取り出す。

セーラ「これは先刻の買物のお釣りだし、この六ペンス銀貨は、この間……」

20 フラッシュ（第十八話より）

セーラに、その六ペンス銀貨を押しつけるドナルド――

セーラの声「お金持ちの男の子が、みすぼらしい私を野菜売りと間違えて恵んでくれたお金なの」

21 同・馬車のたまり

セーラ「いつかお返ししなければと思っているお金なのよ」

ピーター「（微笑）ご心配なく……手紙の紙と封筒は、ちゃんと手に入れてみせますよ」

22 小さな教会の全景

——鐘が鳴っている。

23 同・教会の中

野菜籠を脇に、心配気に待つセーラ。

離れた一角で、微笑で頷く老司祭が、ピーターに書類箱を渡すのが見える。

ピーター、ペコリと頭を下げると、セーラの所へ駆け戻って来る。

ピーター「お待たせ……ついでに、インクとペンも貸して貰いましたよ」

セーラ「まあ、ピーターったら……」

24

テームズ河畔

石段を上って来る封筒を手にしたセーラと、野菜籠を
抱えたピーター。

セーラ「有難う、ピーター……お蔭で手紙はなんとか書けたけど、
切手もなしに、どうやってインドへ……」

ピーター「任しといて下さい。うまい手を考えてあるんですよ」

セーラ「えっ……」

その時、遠く汽笛の音——

ピーター「ほら、あれですよ」

セーラ、怪訝にピーターの指す彼方を見る——

×　×　×

テームズの下流に、林立する汽船、帆船のマスト群が
見える——

×　×　×

セーラ「（怪訝）あれは……お父様がインドへ発った時行ったロンドン港でしょ」
ピーター「ええ……あれだけの船が停っているんです。うまく行けば、インド航路の船が入っているかも知れません、その船員に手紙を頼むんですよ」
セーラ「まあ、あなたって、なんて智恵があるの」
ピーター「参ったなあ。うちの近所じゃ、アメリカへ出稼ぎに行ってる親戚に手紙出す時は、いつもこの手を使ってるんですよ」
セーラ「まあ……」
——ボウッと汽笛の音。

25

ロンドン港・埠頭

巨大な船、船、船が横附けされている。

×　　　×　　　×

その一角を来るセーラとピーター。

ピーター、汽船を見上げては大声で声をかける。

ピーター「船員さあん！……この船はインドへ行きますかあ？」

×　　　×　　　×

甲板から水夫が見おろし手を振る。

水　夫「こいつはアメリカ行だよ！」

×　　　×　　　×

又、別の船に声をかけるピーター、

ピーター「船長さあん、この船はボンベイを通りませんかア？」

×　　　×　　　×

船長帽の男が、甲板から応える。

船長帽「この船はフランスへ行くんだ。ボンベイ行きなら、あの船がそうだよ」

ピーター「え、有難う……」

×　　×　　×

セーラから封筒を受取った若い船乗りが、

船乗り「すると、この手紙を、ボンベイで、裁判所か警察へ届けりゃいいって訳かい」

セーラ「はい、なんとかお願い出来ないでしょうか」

ピーター「船員さん、この人はインドで亡くなったお父さんの事を調べようとしているんだ。手紙はその為なんだよ」

船乗り「ふうむ、なんだか気の毒な事情がありそうだな……よしきた、そう云う事ならこの俺が間違いなく引受けたぜ」

セーラ「わあ……有難うございます」

ピーター「やったア！」

船乗り「所で、あんたは、インドに住んでいた事でもあるのかね」

セーラ「ええ、昨年のクリスマスまで、お父様とボンベイに住んでいたのです」

船乗り「ええ、そうだったのかい……俺も、ボンベイには何度も船

で寄ってるが、いい港だよなあ、景色がよくってさ」
セーラ「ええ、私、港を見おろす丘の白い洋館に住んでたんです」
船乗り「へええ、じゃ、召使いなんかも一杯いたんだろうな」
ピーター「もちろんですよ」
セーラ「ピ、ピーター」
船乗り「ま、とにかく、あそこは果物がめっぽううまいからな」
セーラ「え、ええ……」
船乗り「それに、あのカレーのからさ！」
セーラ「わあ、想い出しますわ」
船乗り「食べたあと、デザートにバナナをひと口やると、口ん中にほわっと甘さが拡がってさ。たまらないぜ」
セーラ「ほんとに！」
ピーター「ヘエ……バナナなんて、オレ、絵でしか見た事ないもんなあ」
笑う船乗りとセーラ、ピーター。

その時、間近に鳴る汽笛――

船乗り「おっと、こうしちゃいられねえ、船に乗り込む時間だ……じゃ、この手紙は、確かに引受けたぜ」

セーラ「お願いします……あの、お礼を差上げたいのですけど、私……」

船乗り「なあに、そんな心配はいらねえよ。ま、ボンベイからの返事を心待ちに待っているんだな」

セーラ「は、はい……」

船乗り「じゃ、あばよ」

船乗り、手を振って去る――

手を振って見送るセーラとピーター。

26

ボウッと、鳴る汽笛

――インド航路の貨物船が、ゆっくりと岸壁を離れて

行く。

27 埠頭

手を振って見送っていたセーラとピーター、ほっと息をつく——

ピーター「よかったですね……これでなんとかお父様の事が判るかも知れませんよ」

セーラ「ええ……有難う、ピーター……私、お金もないし、あなたがいなかったら、とてもこんな事、思いつけなかったわ」

ピーター「なあに、お嬢さんより、少しばかり世の中の事を知ってるだけですよ」

セーラ「まあ、ピーターったら、また大人ぶって……」

笑うセーラとピーター——

野菜籠を持ったピーターと来るセーラ。

セーラ「ね、ピーター……」

ピーター「え……？」

セーラ「私、ミンチン先生から、お父様が亡くなったって聞いた時、とても信じられなかったの、いいえ、今でも信じたくない気持で一杯なの」

ピーター「ええ、よく判りますよ、その気持」

セーラ「それで、あの時、考えたの……もしお父様が亡くなったって報せが、なにかの間違いだとしたら……」

ピーター「え？」

セーラ「間違いだとしたらの事よ……私が、あの学院を出てしまったら、お父様は、どうやって私を探すの……だから私、どんな辛い思いをしても、あの学院を出てはいけないって、

そう自分に云い聞かせていたのよ」

ピーター「へええ……そうだったんですか……オレ……お嬢様が、なんだってあんな……ミ、ミンチン院長の下で辛い思いを我慢してなきゃならないのかって、ずっと気になって……」

セーラ「有難う、ピーター……でも、これで、もうひとつ、あの学院で我慢して行く支えが出来たわ」

ピーター「支えですって?」

セーラ「ええ、ボンベイから、お父様の消息を知せてくれる手紙が届くまで、私、あの学院にいなくてはいけないの……せめて、そう思う事で、私はあらゆる苦しさに耐えて行けると思うの」

ピーター「お嬢様……!」

29
ミンチン女学院・台所（夕景）

テーブルに置かれた野菜籠から、ジロリと、前のセーラを見るモリー。

モリー「云い訳云うんじゃないよ！　これだけの買物に、夕方までかかる筈ないじゃないか、一体どこで遊んでたんだい」

セーラ「す、すみません……」

一方で、心配そうに見守るベッキー。

モリー「ふん、お前に食べさせる夕食なんて、とっくに私達が頂いちゃったからね。さ、早く残ってる仕事を片附けるんだよ！」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

心配気に見守るベッキー――

30　同・屋根裏部屋の前（夜）

階段を上って来るセーラとベッキー。

ベッキー「では、お嬢様、お父様の消息は……」
セーラ「（微笑）それが私の唯一つの希望なの……じゃ、ベッキー、おやすみ」
ベッキー「あ、おやすみなさい、お嬢様……」

31

同・屋根裏部屋（夜）

入って来るセーラ、微笑し胸がふくらむ。

セーラ「メル……！」

ねずみ穴からメルが出て来る。

セーラ「まあ、メル、まだ起きていてくれたのね。報告する事があるわ。私、今とても希望に燃えているの、なぜって……そうするしか私には仕方ないからよ、メル、判ってくれて？」

首をかしげるメル――

32

同・ベッキーの部屋（夜）

ほっとなるベッキー――呟く。

ベッキー「よかった……あの不倖せな日からお嬢様の声がこんなに明るく響いたのははじめてだわ……ほんとによかった……」

33

同・屋根裏部屋（夜）

間近かに近づいたメルに、掌のパンクズを与えるセーラ――

セーラのN「……そうです、あの手紙は、私がお父様の消息を知る最后の手掛りでした……」

――父の写真を手にみつめるセーラ。

おわり